

まんだら通信

第188号 (通巻225号)

平成24年(2012)02月 仏陀佛誕2578年 皇紀2672

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



『にっぽん 微笑みの国の物語』

標題は一月四日夜、NHKテレビで放送された番組で、『時代を江戸に巻き戻せば』という副題がついています。

便利で快適で、ものが豊かになつたけれども、人間同士の間柄がどこか寒々しく、却つて暮らしにくくなつたのではあるまいかと考えたのでしょね、NHKさんは。

江戸時代の、村のしきたりがそのまま残っている、滋賀県甲賀市水口町の北内貴という、三百人ほどが住む集落には、『時の十人衆』という名譽な役があるのだそうです。

どなたもそれぞれの家ではご隠居で、家のやりくりは若い人に任せている好々爺ですが、集落全体に関わることで、たとえは季節ごとの氏神様の神事のすべて、神饌田の耕作、道ばたのお地藏様の周りの草取りなど、いつも『時の十人衆』が取り仕切ります。毎朝の散歩ではお日さまを拝み、一面の田

んぼに深々と礼拝し山に向つて手を合せるという、心の底から神仏や自然を敬う気持ちが強い人たちがばかりです。

慶応三年(1867)に第二回パリ万国博覧会が開かれ、初めて日本が参加しました。

出品物や日本の催し物を見た人たちは、その洗練されたありさまにビックリして、自分の目で確かめたいと思つた人も多かつたのではないのでしょうか。

多分そういう事情もあつて、明治になつて外国の公使や書記官など公務で来日する人だけでなく、先月号に書いたように一般の人たちも日本にやつてきました。

パリ万博に遅れること10年、明治11年に来日したイギリス人のイザベラ・バードもその一人で、当時世界第一級の文明国、大英帝国の人ですから、「遅れた国」日本への手厳しい批評もあります。来日当初は「小さく醜く縮こまつた親切さだが、がに股で猫背で胸板の薄い貧相な人々…」という具合に。

イザベラさんの旅の目的は、文明開化の毒に侵されていない東北地方から北海道まで、じかに自分の目で確かめることでしたが、横浜で雇つた鈴木という通訳兼助手とつた二人、蚤やシラミや蚊と、物見高い人々の目に閉口しながら旅を続ける間に「勤勉、素朴で礼儀正しく、神仏を敬い、貧しい暮らしなのにいつも微笑みを絶やさない子煩悩な人たち」に触れる間に、すっかりこの国を見直すようになります。

「きのう草ひもを一本落としてしまった。もう日が暮れていたが、馬子は一里引き返して見つけてくれたので、心付けを渡そうとしても、旅の最後まで無事に届けるのが私の当然の責任だといつて受け取らない。」と感心しています。

山形県置賜盆地を見た時に「米、

麦に留まらず杏やキュウリ、大豆にザク口、あらゆるものが作られている。実り豊かに微笑む大地でありエデンの園である。アジアのアルカディア(桃源郷)というべきで、その景色は鋤で耕したというより絵筆で描いたように美しい。」と『日本奥地紀行』に絶賛しています。

その時から一五〇年。番組では、イングランドの女子学生さんが、イザベラ・バードの東北地方への旅の跡をたどります。

どこまでも続く緑の里山、波打つ田んぼの美しさに彼女は感激するのですが、その頃には誰にも想像できなかった、物事をお金の多少で考えるという今の時代になつて、休耕田が増え人が住まなくなつた村落が増え、地域のつながりができにくくなつていよう有り様も目にします。それでも、と私は言いたいのですが、上の写真をご覧ください。

一番左がその学生さんですが、このバカでかいワラ人形は道祖神で『鹿島様』という神様だそうです。

腰裏で隠れています。男性の立派な象徴もそなえ、腰にはちやんと刀を差し、集落の入り口に頑張つて、外から来る病気やあらゆる災難を追い返す役目だそうです。夏の鹿島様のお祭では、幡や幟や灯明で賑やかに飾り立てた屋台を、笛太鼓で一軒ごとに引き回します。

家々では、みんなが手を合せて拝みます。誇らしげに太鼓を叩く若者は「結婚して子供が産まれたら、その子も祭りを続けてくれるだろう」と言っています。

去年の大震災で辛うじて助かった人たちは、集落の集会所や個人の家で、救済物資が届くまで頑張り通しました。この『絆』の強さは、常日ごろの共同作業のお陰でしょうね。面倒だから、お金にならぬからと、しきたりをやめてしまった私たちは、果たしてできるでしょうか。

◆毎朝6時に梵鐘を突きます。どうかすると寝過ぎて失敗することもあるのですが、一番寒い時刻ですから、気合いを入れて外に出ないと風邪が心配です。立春が過ぎて日が伸び、夕方5時の鐘は随分明るくなりましたが、朝はまだ殆ど変わりません。突いている本人にはうるさいばかりですが、遠くで聞く梵鐘は如何にも日本の風景に馴染んで、長閑でいいものです。30何年前、初めてインド巡礼に行ったとき、ブッダガヤの日本寺に泊めてもらいました。夕方、日本式の梵鐘の音がしま

した。紫雲寺と同じ京都、太秦の岩澤さんが納めたものだそうで、ビハールの大平原に沈んで行く太陽との相性が殊の外良く、しばし聞き入ったことを思い出します。◆時々お寺に黙って、俗名のまよそでお葬式をするお家があります。あとで聞くと「遠くまで来てもらうのは迷惑だと思ひまして」というお返事。お寺とお檀家は身内と同じです。遠近は関係ありません。亡くなった人の気持ちになれば、見ず知らずのお坊さんのお経より、私の方がいいに決まっています。

◆数日前のNHK朝のニュース。今年初め北陸の方で、多くの車が雪に閉じこめられるということがありました。その時、沿道の人たちが自宅のトイレをお貸ししたり、熱いうどんを作ってあげたり、色々の親切があつたそうで、そのお礼の手紙が続々と届いている、というお話でした。兎角、聞きたくもない話が多いこの頃、久し振りに「日本ってまだまだ捨てたもんじゃないな」と思いました。◆今を盛りの菜の花に、寒さを避けて引っ越してきたセイヨウミツバチが来ています。もうじき春です。 2011/02/09 龍渉



余滴

犬の教え

昔、ペナレスのブラフマダッタ王は、ある日、お気に入りの豪華な馬車に乗って、離宮にでかけて行きました。一日をゆつくり遊んだ王は、日もとっぷり暮れてから王宮に帰って来たのです。疲れていた家来達は、馬だけを馬屋に入れて馬車は王宮の庭においたまま家へ帰ってしまいました。

ところがその夜、運悪く雨が降ったのです。馬車はずぶぬれになって、つけたままになっていた革ひもや革具は水を吸ってすっかり柔らかくなりました。これを王宮に飼われていた犬達が食べてしまったのです。

翌朝これを見た家来達は、このことを王様に伝えました。「けしからん。見つけ次第、その犬どもを皆殺しにしてしまえ」と厳しく命じたのです。こうしてそとぎに犬の大虐殺がはじまりました。

犬達は命からがら、町はずれの大きな墓地に住んでいる犬の頭の所へ逃げ込みました。

「どうした。こんなに沢山集まって来て、一体何があったのだ」
頭が聞くと、犬達は恐ろしさにおびえ切ったまま答えたのです。

『犬を皆殺しにする』という、おふれが出たのです。私達は見つけ次第殺されてしまいます。もう、ずいぶん殺されました」

「ゆうべ、王さまの殿の庭で、犬が王さまの大切な馬車の革ひもと革具を食べたというので、このおふれが出たのです」

これを聞いた犬の頭は、(あの厳重な警備だ。外の犬はまず王宮には入れない。これは王宮で飼われている犬達の仕業に違いないのだ。それをまったくがめもせず、罪もない外の犬達を殺すとは何と

いうことだ。よし、私が行って王さまに本当の犯人を見せ、みんなの命を守ってやるよ)」

こう決心すると、力強い声で言いました。

「みんな、もう恐がることはない。私これから行って、王さまによく話をしに来よう。私が帰って来るまで、みんな安心して待っていなさい」

犬達はそれを聞くと、必死で頭を引きとめました。

「とんでもないことです。見つかったら最後、すぐに殺されてしまいます。どうか行かないで下さい。」けれども犬の頭は、(必ず、私は仲間達を助けるのだ。人間よ、私の上には、石もハンマーも投げてはならない)と一心に念じて、ただ一頭、危険極まりない町の中へ入って行ったのです。このたとえようもない、あふれるような仲間達への慈しみ、何とかして助けてやらなければという哀れみに満ちた心とその強い決意のためでしょうか、際立つて大きく、堂々とした犬の頭の姿を見ながら誰一人石を投げようとも、ハンマーを投げつけようとも、ましてや殺そうなどとは少しも思わず、瞬間、王の命令さえ忘れて、家来達は黙って子牛ほどもある犬を見送っていたのです。

こうして奇跡的にも、無事に王のいる法廷に入ることのできた犬の頭は、一飛びに玉座の下に入り込みました。驚いた家来達が引っぱり出そうとするのを、これもふしぎなことに王自身がとめたのです。犬の頭は勇気をふるって這い出ると、ブラフマダッタ王にお辞儀を言いました。

「王さま、王さまは私達犬を、皆殺しにしようとお考えですか」

「その通りだ」

「私どもにどんな罪があるのでしょうか」

「余の大切な馬車の、革ひもと革具を食

べたからだ」
「食べた犬を、確かにご存知なのでしうか」

「それは知らん」

「それははっきりしないというのに、見つけ次第、片端しから犬を殺すというの

は、正しいことではありません」

「しかし、馬車の革ひもと革具は、たしかに犬が食べたのだ。だから見つけ次第、すべての犬を殺せと命じたのだ」

「それはすべての犬ですか。それとも、殺されない犬もいるのでしょうか」

「もちろんいる。それは余の飼っている王宮の犬達だ」

「王さま、それではあまりにも筋が通りません。すべての犬を殺せ、と命令なさ

りながら、王宮の犬だけは別、というのでは、まったくの片手落ちです。それは無理を通すことで、正當なやり方ではありません。王さまとしてなさってはならないことです。一国の王が物事の原因を取り調べられる時には、はかりのように正しくなさらなければなりません」

ここまで言うと犬の頭は一段と、心に深くしみ徹る清らかな声で、

「王さま、王宮に飼われている、血統正しく、美しく力のある犬達は殺されずに、外の私達だけが殺される。これは、すべての犬を殺すのではなく、弱いものを殺すということですよ」

と言いました。王はなるほど考えてみるとその通りであったと、少しばかり反省しはじめたのです。

「賢い犬よ、それではお前は、革ひもや革具を食べた犬を知っているのか」

王は言葉までだんだんいいないになっていました。

「知っております。それは王宮の犬達です」

「どうしてそれがわかるのかな」

犬の頭は、牛乳を煮つめた中で吉祥草

を潰して、その液を王宮の犬達に飲ませようと言いました。王がその通りにさせると、何ということでしょう。それを飲んだ犬達はみな、液と一緒に、食べていた革を、すっかり吐き出してしまったのです。あまりのことに王は、

「すべてをご存知の、真理に目覚めたお方の仰せのようだ」

と驚きと尊敬と喜びでいっぱいになって、王の印である白いかさを、うやうやしく犬の頭の上に差し出しました。

犬の頭は改めて王に正義を説くと、これからも怠らず努力を続けられるように

と言って、

一、生きものを殺さないこと、

二、盗みをしないこと、

三、男女の間柄を正しく保つこと、

四、うそをつかないこと、

五、お酒を飲まないこと、

この五つの戒めを受けてから、王に白

いかさを返したのです。

王はすぐに『一切の生きものに恐れを抱かせてはならぬ』というおふれを出しました。また、犬の頭をはじめすべての犬達に、今日からは自分と同じ食べ物を与えよと係の者に命じたのです。

それから後、ブラフマダッタ王は生涯、この『犬の教え』を固く守って正しく国を治め、寿命が尽きるとその徳行によって天に生まれて行きました。

今月のお話は数多いお釈迦さまの前生譚、つまりジャータカの一つです。

生まれ変わり死に変わり輪廻転生を繰り返しながら善行を積んだから、お釈迦さまは較べようもない偉大な悟りを開いたのだとインドの人たちは考えました。ですから『犬の頭』はこの世に生まれる前のお釈迦さまの姿です。

このお話の終りにある五つの戒めは、お釈迦さまがお説きになった『在家の五戒』そのものです。